

現存最古の王守仁の詩文集

——北京・上海兩圖書館藏の『居夷集』について——

永 富 青 地

序言

中國、北京圖書館及び上海圖書館に、『居夷集』と題する王守仁の詩文集が所藏されている。同書は、王守仁の詩文集としては現存最古のものでありながら、今日に至るまで實物を見た上での研究が全くなされず、研究上の空白となつてきた。

本稿は、同書と、同書の編纂に攜つた人々の紹介を意圖するものである。

一

『居夷集』に關する早い時期における言及としては、黃綰の

現存最古の王守仁の詩文集（永富）

「陽明先生存稿序」における王守仁の著作についての、「僅かに存するに足る者は、唯だ文錄・傳習錄・居夷集のみ」⁽¹⁾という文及び、錢德洪の「答論年譜書」第八書における、「徐珊、嘗て師の爲に居夷集を刻す、蓋し癸未の年に在りしならん。門に及ぶは則ち辛巳の年九月にして、龍場の時に非ざるなり」⁽²⁾が擧げられる。

近代以後の、本書に關する言及としては、管見の限り三島復の『王陽明の哲學』における以下の文が有るのみである。⁽³⁾

嘉靖二年、徐珊、陽明の爲めに居夷集を刻すること、年譜附錄五に見ゆ、これ龍場驛にありし時作りし詩文集なるべし。謝廷傑刻本全書中の文錄外集一を按ずる

に、居夷詩として去婦歎五首以下并せて凡そ百十一首あり、恐らく居夷集の一部たりし者なるべし。

以上の内容から見て、三島氏が本書を實見せず、錢德洪の「答論年譜書」第八書によっているのは明らかと言えらう。

二

本稿の冒頭において述べたように、『居夷集』は、現在では北京圖書館に二點、上海圖書館に一點が所藏されている。

最初に北京圖書館藏本について述べてみることにしたい。

北京圖書館藏本に關しては、『北京圖書館古籍善本書目』に以下の⁽⁴⁾ように記されている。

居夷集三卷 明王守仁撰 明嘉靖三年丘養浩刻本 二册 十行二十字 白口 左右雙邊 五〇九四(書號)

『北京圖書館古籍善本書目』に著録されているのは上記の一點のみだが、實際に調査してみたところ、同圖書館にはもう一點の『居夷集』(書號二三三六)が所藏されていることを確

認することが出來た。以下、前者をA本、後者をB本と呼ぶこととする。後者、B本の版式や行格は前者、A本と同様であり、版木の磨滅も前者よりはるかに少ないが、字畫は前者より鈍く、やや不自然に感じられる。兩テキストの間の字句の異同は、後掲の對照表から明らかなように僅かに二字のみであり、恐らく後者は前者のほぼ忠實な覆刻本であり、前者の版木の磨滅後、それにならって作られたものだと思われる。

上海圖書館藏本については、『中國古籍善本書目 集部上』に、以下の⁽⁵⁾ように記されている。

居夷集三卷 明王守仁撰 明嘉靖三年丘養浩刻本 清馬紹基校竝跋

ここからも判るように、上海圖書館藏本には、清人馬紹基の校語と跋文が附されている。⁽⁶⁾卷末に筆で記された彼の跋文の末尾には、「乾隆四十九年正月望後、元和の後學、香谷の馬紹基、南寧府平塘分署にて校す⁽⁷⁾」とあり、それが記されたのが乾隆四十九年(一七八四)であることが判明する。なお、上海圖書館藏本の丘養浩序の後には三行の識語が記されている

が、その末尾には「甲寅十二月、孫毓修謹注」とあり、⁽⁸⁾本書が少なくとも彼ら二人の所有を經ている事を物語っている。以下、上海圖書館藏本をC本と呼ぶこととする。また、C本とA・B兩本との間で、版式や行格の違いは見られない。

次に上海圖書館藏本の本文について述べると、後掲の對照表に示したように北京圖書館藏本とは文字の異同が幾つか存在するが、特に卷之一の「氣候圖序」での異同が注目される。そこでは、C本において「三百六十世」と「一萬八百年」とあるそれぞれ五文字を、A・B兩本では前後をそのままにしてそれぞれ「十二世」・「三十年」と三文字にしているため、不自然な空格が生じている。この事から見ても、現存する三本のうち、C本が最も舊く、恐らく嘉靖三年の原刊本であり、A本がそれに次ぎ、B本が最も新しいと考えられる。従って、本書は明代において少なくとも三度開版されている事になり、當時において廣く讀まれていたことが判明するのである。

三

『居夷集』の構成は、各本とも以下の通りである。

現存最古の王守仁の詩文集（永富）

「絛居夷集」（丘養浩）

目錄

本文

「韓柱跋」（假題）

「徐珊跋」（假題）

上記の丘養浩の序及び韓柱・徐珊の跋は、本書の成立を考える上で特に重要であるため、次にその全文を掲げておくこととしたい。なお、これらの序跋について、各本の間に字句の相違は存在しない。

絛居夷集

居夷集なる者は、陽明先生、貴陽に逮責せられし時に著す所なり。溫陵の後學丘養浩、刻して以て諸れを同志に傳へんとす。或ひと曰く、先生の學は、専ら孔孟を以て師と爲し、明白簡易、一たび世儒の派分枝節の繁を洗ひ、微言大訓、天下の學士、之れを宗とす。而して獨り此れを刻するは何をか待つ、と。則ち之れに解して曰く、先生の資、明睿澄徹なり。天下の實理に於て、固より已に實に見て而も實に之れを體せり。而れども養熟道

凝するは、則ち貴陽の時に於て獨り得ること多しと爲す。冥會遠趨し、衆淆を收めて以て諸聖を折す。道に任じて餘力有りて、道を行ひて餘功有り。固より皆な夷に居りし者の之れを爲すなり。古の聖人の諸難を歷試するは、造物者、將に大任を降さんとするの意、然ること無からんや。養浩生るるや後にして、學は本を知らず、政は以て率化するに足らず。先生、輒ち合せて之れを教ふ。歲月道（せま）るが如く、典刑は望に在り、無能にして新主簿の教ふべきと爲りて、又た無能にして元城の錄と爲るを愧づるなり。引、言を以てす。同（とも）に集を校する者は、韓子柱廷佐・徐子珊汝佩、皆な先生の門人なり。嘉靖甲申の夏孟朔、丘養浩以義書す。

〔韓柱跋〕（假題）

夫れ文は以て道を載するなり。陽明夫子の文は、道心に由りて達するなり。故に之れを求めて躍如たるなり、之れを究めて奥如たるなり、之れを體して擴如たるなり、之れを愛して美なり、之れを傳へて愛なり。此れ居夷集の由りて刻する所なり。惟だ茲（こ）れのみを刻するは、一班を見るなり。之れを學ぶ者、之れを全うするを

求むるの志、烏乎（なん）ぞ已まんや。門人韓柱、百拜して識（しる）す。⁽¹⁰⁾

〔徐珊跋〕（假題）

居夷集の刻成るや、或ひと以爲へらく、陽明夫子の教へは、致知のみ、諸（もろもろ）の文字の集は、傳へずして可なり、と。珊謂はく、天に四時有りて、春秋冬夏、風雨霜露、教へに非ざるは無し。地、神氣を載せて、風霆流形、庶物露生、教へに非ざるは無し。夫子、夷に居ること三載、位に素して以て行ひ、外を願はず。蓋し入るとして自得せざるは無からん。其の文を爲す所、應酬寄興の作と雖も、自得の心、之れが言外に溢る。故に其の文は、閑以て肆に、純以て雅に、婉曲にして暢びやかに、怨尤する所の者無し。此れ夫子の知、發して文と爲るなり。故に曰く、其の實を篤くして藝（う）うれば則ち傳はる、と。賢者得て以て學びて之れに至れば、是れ教へ爲り、則ち是の集や、教へに非ざるは無し。傳へずして可ならんや。之れを言語文字の間に求め、以て其の繩度を師とするが如きは、是れ則ち荒なり、傳へずして可なり、と。集凡そ二卷。附集一卷は、則ち夫子逮獄の時

及び諸の途に在りしの作なり。併せて之を刻するは、亦た以て入るとして自得せざるは無きを見るのみ。門人徐珊、頓首拜して書す。⁽¹¹⁾

上記の序跋のうち、丘養浩の「敍居夷集」に、「溫陵の後學丘養浩、刻して以て諸れを同志に傳へんとす」・「同（とも）に集を校する者は、韓子柱廷佐・徐子珊汝佩、皆な先生の門人なり」とあることから明らかなように、本書の刊行者は丘養浩であり、韓柱・徐珊の二人は校訂者ということになる。

丘養浩については『閩書』卷之八十五に詳細な傳記が記されている。同書に、「丘養浩、字は以義、・・・二十四にて進士と成る、是れ正徳辛巳の歲爲り。餘姚の令を授けらる。・・・嘉靖乙酉、召され入りて御史と爲る」とあることから、弘治十一年（二四九八）の生まれであることが判る。⁽¹²⁾

従つて、彼は成化八年（二四七二）の生まれである王守仁より二十六歳の年少ということになる。「敍居夷集」において彼は王守仁から教えを受けたと述べているが、それは正徳十六年から嘉靖四年にかけての餘姚赴任中のことと斷定して問題なからう。この時期、王守仁は紹興に家居していたが、生れ故郷の餘姚にたびたび歸省したことが記録にも残されているた

めである。なお、錢德洪は正徳十六年九月に王守仁が餘姚に歸省した折に入門しているが、それも丘養浩の餘姚在任中のことである。

徐珊の經歷については、『四庫全書總目』卷之三十二に著録されている、彼の詩文集である『卯洞集』の項に、「珊、號三溪、餘姚の人。官は辰州府同知たり」⁽¹³⁾とあり、湖廣省辰州府（現湖南省沅陵縣）の同知にまで至った事が判る。また、『浙江通志』卷之百三十七、選舉十五、明舉人の「嘉靖元年壬午科」の項にも、「徐珊、餘姚人」とあるが、注目すべき事に、同年の舉人として、「韓柱、餘姚人、福建僉事」として韓柱の名も挙げられているのである。⁽¹⁴⁾徐珊・韓柱は同郷であると共に、同年（嘉靖元年「一五二二」）の舉人ということになる。彼ら二人が『居夷集』の校訂に當つたのは、この縁によるものであらうか。

また、徐珊は錢德洪とも深い關係にあった。王畿の手になる錢德洪の傳記である「刑部陝西司員外郎特詔進階朝列大夫致仕緒山錢君行狀」には、王守仁が正徳十六年（一五二二）に餘姚に歸郷した折の事について、「夫子（王守仁）の姚に還るや、君（錢德洪）、諸友の范引年・管州・鄭寅・徐珊・吳仁・柴鳳等數十人を相ひ率ひて、龍泉の中天閣を闢（ひら）き、夫

子の座に升りて開講せんことを請ふ⁽¹⁵⁾と記されており、彼が錢德洪と同時に王守仁に入門した友人の一人であることが判る。後年、錢德洪が『居夷集』の刊行者と誤認したのは、この事が關係している可能性が有ると思われる。

なお、彼の死については、『明儒學案』卷之二十八の「孝廉冀闇齋先生元亨」の項に次のようなエピソードが伝えられている（「」内は割り註）。

癸未（嘉靖二年、一五二三）南宮にて策を發し、心學を以て譏りを爲す。餘姚に徐珊なる者有り、亦た陽明の門人にして、對へずして出づ。先生（冀元亨）の對ふると、徐珊の對へざるとは、一時、兩つながら之れを高しとす。而れども珊、辰州の同知と爲るや、餉を侵して縊死し「時人、之れが爲に語りて曰く、君子、道を學べば則ち人を害し、小人、道を學べば則ち縊死す、と」、人、之れを稱するを羞づ。謂ふ所の棺を蓋ひて論定まる者なるや、非や。⁽¹⁶⁾

不正により自殺したというのだから、それ自體は不名譽なことではあるが、彼が當時において決して無名の人物ではな

かった事は窺えるであろう。

なお、「敘居夷集」末尾の紀年から判るように、本書は嘉靖三年に刊刻されているが、次に擧げる、王守仁の早期に刊行された詩文集の刊行年代からも判るように、從來知られていた王守仁の詩文集のうち、現存しない鄒守益編の文録を含めても、本書は最古のものということになり、本書の價值が極めて高いことは歴然としている。

○王守仁の早期に刊行された詩文集の刊行年代

嘉靖三年（一五二四） 丘養浩編『居夷集』刊

嘉靖六年（一五二七） 鄒守益編『陽明先生文録』刊

（現存せず）

嘉靖十二年（一五三三） 黃綰編『陽明先生文録』刊

嘉靖十五年（一五三六） 錢德洪編「姑蘇本」『陽明先生

文録』刊

〔參考〕

隆慶六年（一五七二） 錢德洪編『王文成公全書』刊

特に注目すべき點としては、王守仁が亡くなったのが嘉靖七年（一五二八）であるため、本書は彼の生前に刊行された現

存唯一の文集であるということが挙げられる。因みに、現存する刊行年が明らかな王守仁の文集のうち、本書の次に刊刻されたものは嘉靖十二年（一五三三）刊の黃綰編『陽明先生文錄』であるが、本書に遅れること九年ということになる。

また、徐珊が本書について、「集凡そ二卷。附集一卷」と述べている事も重要である。従って、本書は正しくは全二卷・附録一卷ということになる。

丘養浩の序及び徐珊の跋において、特に龍場配流期の詩文のみを刊行することの必要性を強調しているのも興味深い。實は、後掲の對照表からも判るように、本書は龍場期の王守仁の心境を物語る多數の詩文を収めてはいるものの、後年「年譜」において語られるような、所謂「龍場の大悟」に關する詩文は、一切收められてはいない。それにもかかわらず、彼らがこの時期の詩文を刊刻することの必要性を強調していることから、この時期には、弟子達の中で王守仁の龍場配流期が特別な意味を持つというコンセンサスが成立していたことが判るのである。

四

次に、『居夷集』本文の内容と、『王文成公全書』との異同

現存最古の王守仁の詩文集（永寛）

を見ていきたい。なお、『居夷集』諸本間の相違については上段の「一」内、『王文成公全書』での收録卷數は下段の「一」内にそれぞれ示してある。

居夷集卷之一

門人韓柱徐珊校

『居夷集』

○「吊屈平賦」

○「吊屈平賦 丙寅」〔十九〕

正徳丙寅守仁以罪

正徳丙寅某以罪

○「何陋軒記」

○「何陋軒記 戊辰」〔二十〕

吾不爲然也

吾不謂然也

芟於叢棘之間

居於叢棘之間

益孚比

益孚比

因名軒曰何陋

因名之曰何陋

譎僞無所不至

譎詐無所不至

○「君子亭記」

○「君子亭記 戊辰」〔二十〕

三

前榮、架楹爲亭

前營、駕楹爲亭

外堅而直

外節而直

謙於自名也

謙於自名也

○「遠俗亭記」

○「遠俗亭記 戊辰」〔二十

三〕

「本文に異同無し」

○「氣候圖序」

○「氣候圖序 戊辰」〔二十

二〕

十二萬九千六百年

十二萬九千六百年

運分而爲三百六十世

運分而爲十二世

み

世分而爲一萬八百年

世分而爲三十年

み

無水則書

無水則書

春無水則書

春無水則書

爲使者曰

謂使者曰

是故思馳聘者

是故思馳聘者

○「送憲副毛公致仕歸桐江書

○「送毛憲副致仕歸桐江書院

院序」

序 戊辰」〔二十二

欲仕則遺其母

欲仕則違其母

欲養則遺其父

欲養則違其父

○「龍場生問答」

○「龍場生問答 戊辰」〔二十

四〕

「本文に異同無し」

○「象廟記」

有鼻之祠

毀於有鼻

流澤之遠也且也

○「恩壽雙全詩後序」

亦孰非侍君

じ

○「臥馬塚記」

丙缺門若

繾綣嘶抹

面勢還拱

植樹葱蔚

○「寶陽堂記」

日易陽之屬

人其甘爲小人

○「重修月潭寺建公館記」

○「象祠記 戊辰」〔二十三

有庫之祠

毀於有庫

流澤之遠且久也

○「恩壽雙全詩後序 戊辰」

〔二十二

亦孰非侍御君

○「臥馬塚記 戊辰」〔二十

三〕

丙缺門若

繾綣嘶抹

面勢環拱

植樹葱蔚

○「寶陽堂記 戊辰」〔二十

三〕

日乃陽之屬

實其甘爲小人

○「重修月潭寺建公館記 戊

辰「二十三」

翻隼翔鵠

翻集翔鵠

有所瞻依

有所瞻依

餘姚王守仁記（文末）

〔無し〕

○「瘞旅文」

○「瘞旅文 戊辰」「二十五」

正德四年秋七月

正德四年秋月

明早遣人

明日遣人

嗚呼傷哉

嗚呼痛哉

○「玩易窩記」

○「玩易窩記 戊辰」「二十

三」

穴山麓爲窩

穴山麓之窩

○「重刊文章軌範敘」

○「重刊文章軌範序 戊辰」

「二十二」

〔本文に異同無し〕

○「五經臆說序」

○「五經臆說序 戊辰」「二十

二」

輒爲之訓什

輒爲之訓釋

非誠旨

而非誠旨

○「答友人」

○「答人問神仙 戊辰」「二十

二」

齒漸搖搖

齒漸搖動

又能經月

又常經月

然其呼吸動靜

然則呼吸動靜

受氣始先、殆

受氣之始、此殆

○「答毛憲副書」

○「答毛憲副 戊辰」「二十

一」

亦非守仁使之也

亦非某使之也

未嘗辱守仁、守仁

未嘗辱某、某

守仁亦嘗講之

某亦嘗講之

守仁之居此

某之居此

居之太然

居之泰然

守仁也受教多矣

某也受教多矣

○「與安宣慰書」

○「與安宣慰 戊辰」「二十

一」

守仁得罪朝廷

某得罪朝廷

守仁益用震悚

某益用震悚

敬受米一石

敬受米二石

○「又」

○「二 戊辰」「二十一」

不敢以擅改

不可以擅改

縱遂幸免於一時

縱幸免於一時

有所違越

有所違。是

○「又」

○「三 戊辰」「二十一」

故且隱息其議

故且隱忍其議

諸君以次潛回「C本のみ」

諸軍以次潛回

守仁非爲人作說客者

某非爲人作說客者

○「論元年春王正月」

○「論元年春王正月 戊辰」

其改月與時也、何

則其改月與時、已何

前漢律曆志

前漢律曆至

居夷集卷之一終

居夷集卷之二

門人韓柱徐珊校

『居夷集』

『王文成公全書』「全て卷十九

「居夷詩」

○「去婦嘆」

○「去婦嘆五首」

「本文に異同無し」

○「羅舊驛」

○「羅舊驛」

布谷鳥啼村雨暗

市谷鳥啼村雨暗

○「沅水驛」

○「沅水驛」

「題目、本文とも異同無し」

○「鐘鼓洞」

○「鐘鼓洞」

年來夷險還忘卻

來年夷險還忘卻

○「平溪館次王文濟韻」

○「平溪館次王文濟韻」

蠻煙瘴霧承相待

蠻煙瘴霧承相往

○「清平衛卽事」ゝ「七盤」

○「清平衛卽事」ゝ「七盤」

「題目、本文とも異同無し」

○「始至龍場無所止結草庵居

○「始至龍場無所止結草庵居

之」

之」

靈籟響朝湍

靈瀨響朝湍

匏樽映瓦豆

汚樽映瓦豆

畧稱宛茨迹

畧稱茅茨迹

○「始得東洞遂改爲陽明小洞

「逸詩、後述」

天」

○「移居陽明小洞天」

○「始得東洞遂改爲陽明小洞

天三首」

夷坎仍掃灑

夷坎仍灑掃

陪飲皆汗樽

杯飲皆汗樽

○「謫居糧絕請學于農將田南

○「謫居糧絕請學于農將田南

山永言寄懷」ゝ「諸生來」

山永言寄懷」ゝ「諸生來」

「題目、本文とも異同無し」

○「西園」

熒熒夏花發

○「水濱洞」

〔題目、本文とも異同無し〕

○「無寐」(第二首)

〔本文に異同無し〕

○「無寐」(第二首)

〔本文に異同無し〕

○「諸生夜坐」ゝ「別友」

〔題目、本文とも異同無し〕

○「贈黃太守澍」

鹿麕能友于

○「寄友用韻」

〔題目、本文とも異同無し〕

○「秋夜」

遙窮出晴月〔C本のみ〕

露凝松佳冷

○「採薪」

〔本文に異同無し〕

○「龍岡漫興」

○「西園」

熒熒夜花發

○「水濱洞」

〔題目、本文とも異同無し〕

○「無寐」二首

○「其二」

○「其二」

○「其二」

○「諸生夜坐」ゝ「別友」

○「贈黃太守澍」

鹿麕能友于

○「寄友用韻」

○「寄友用韻」

○「秋夜」

○「秋夜」

遙穹出晴月

雲凝松佳冷

○「採薪」二首

○「採薪」二首

○「龍岡漫興」五首

〔本文に異同無し〕

○「答毛拙庵見招書院」・「老

櫨

〔題目、本文とも異同無し〕

○「却巫」

自笑孫僑非大夫

○「過天生橋」ゝ「雪夜」

〔題目、本文とも異同無し〕

○「元夕」

去年今夕臥燕臺

○「家僮作紙燈」・「白雲堂」

〔題目、本文とも異同無し〕

○「來仙洞」

應笑山人久未歸

○「木閣道中雪」

〔題目、本文とも異同無し〕

○「元夕雪用蘇韻」

〔本文に異同無し〕

○「曉霽用前韻書懷」

〔本文に異同無し〕

○「答毛拙庵見招書院」・「老

櫨

〔題目、本文とも異同無し〕

○「却巫」

自笑孫僑非丈夫

○「過天生橋」ゝ「雪夜」

〔題目、本文とも異同無し〕

○「元夕二首」

去日今夕臥燕臺

○「家僮作紙燈」・「白雲堂」

〔題目、本文とも異同無し〕

○「來僊洞」

應笑山人久未歸

○「木閣道中雪」

〔題目、本文とも異同無し〕

○「元夕雪用蘇韻」二首

〔本文に異同無し〕

○「曉霽用前韻書懷」二首

〔本文に異同無し〕

- 「次韻陸僉憲元日喜晴」
栢府樓臺啣倒影
- 「元夕木閣山火」～「村南」
○「題目、本文とも異同無し」
- 「山途」
○「本文に異同無し」
- 「白雲」
○「題目、本文とも異同無し」
- 「答劉美之見寄次韻」
勳業久辭滄海夢
萬死寧期尙得身
- 「寄徐掌教」・「書庭蕉」
○「題目、本文とも異同無し」
- 「送張憲長左遷鎮南大參次韻」
○「本文に異同無し」
- 「南庵次韻」
○「本文に異同無し」
- 「又」
○「本文に異同無し」
- 「次韻陸僉憲元日喜晴」
栢府樓臺啣倒影
- 「元夕木閣山火」～「村南」
○「山途二首」
- 「白雲」
○「答劉美之見寄次韻」
勳業已辭滄海夢
萬里寧期尙得身
- 「寄徐掌教」・「書庭蕉」
○「送張憲長左遷滇南大參次韻」
- 「南庵次韻二首」(第一首)
○「南庵次韻二首」(第二首)
- 「觀傀儡用韻」
○「本文に異同無し」
- 「徐都憲同遊南庵次韻」
○「題目、本文とも異同無し」
- 「即席次王文濟少參韻」
○「誅求滿地促官逋」まで
- 「荆西寇盜紆籌策」
○「即席次王文濟少參韻」
○「贈劉侍御二首」
- 「觀傀儡次韻」
○「徐都憲同遊南庵次韻」
- 「即席次王文濟少參韻二首」
○「荆西寇盜紆籌策」
- 「病筆不能多反」
守仁頓首
- 「夜寒」
○「容餐還羞鏡裏看」
- 「冬至」
○「題目、本文とも異同無し」
- 「春日花閒偶集示門生」
簷下小柳晴更新
- 「次韻送陸文順僉憲」
○「次韻陸僉憲病起見寄」
- 「題目、本文とも異同無し」
- 「病筆不能多及」
某頓首
- 「夜寒」
○「容餐還羞鏡裏看」
- 「冬至」
○「春日花閒偶集示門生」
簷下小桃晴更新
- 「次韻送陸文順僉憲」
○「次韻陸僉憲病起見寄」

○「次韻胡少參見過」

賞心願不在枝頭

○「雲中桃次韻」

飄零須勝委風塵

○「舟中除夕」

「本文に異同無し」

○「淑浦山夜泊」

淑浦山邊泊

○「過江門崖」

「本文に異同無し」

○「辰州虎溪龍興寺聞楊名父

將到留韻壁間」

「題目、本文とも異同無し」

○「武陵潮音閣懷原明」

「本文に異同無し」

○「閣中坐雨」ゝ「僧齋」

「題目、本文とも異同無し」

○「德山寺次壁閒韻」

雲捲春峰善卷臺「C本のみ」

○「沅江晚泊」

○「次韻胡少參見過」

賞心原不在枝頭

○「雲中桃次韻」

飄零須信委風塵

○「舟中除夕二首」

○「淑浦山夜泊」

淑浦山邊泊

○「過江門崖」

○「辰州虎溪龍興寺聞楊名父

將到留韻壁間」

○「武陵潮音閣懷元明」

○「閣中坐雨」ゝ「僧齋」

○「德山寺次壁閒韻」

雲捲青峰善卷臺

○「沅江晚泊二首」

「本文に異同無し」

○「夜泊江思湖憶元明」ゝ

「三山晚眺」

「題目、本文とも異同無し」

○「鷺羊山」

謾憶開雲住薛羅

○「泗洲寺」ゝ「再過濂溪祠

用前韻」

「題目、本文とも異同無し」

居夷集卷之二終

附居夷集卷之三

門人韓柱徐珊校

正徳丙寅冬十一月、守仁以罪下錦衣獄。省愆內訟、時有所述。既出而錄之。「この文は、『全書』では「咎言」の題目の後に位置する」

『居夷集』

○「咎言」

謂予足之何傷

天命何尤兮

○「不寐」

○「夜泊江思湖憶元明」ゝ

「三山晚眺」

○「鷺羊山」

遙憶開雲住薛羅

○「泗洲寺」ゝ「再過濂溪祠

用前韻」

『王文成公全書』

○「咎言 丙寅」[十九]

謂累足之何傷

天命何憂兮

○「不寐」「別友獄中」まで

卷十九「獄中詩十四首」に

一致

煙震日瀕洞

煙霞日悠永

○「有室七章」

○「有室七章」

朝既昌矣

明既昌矣

○「讀易」→「別友獄中」

○「讀易」→「別友獄中」

「題目、本文とも異同無し」

○「答汪抑之」

○「答汪抑之三首」「天心湖阻泊既濟書事」まで卷十九

「赴謫詩五十五首」に一致

良無忠信資

良心忠信資

旅宿蒼峽底

旅宿蒼山底

○「陽明子之南也其友湛元明

○「陽明子之南也其友湛元明

歌九章以贈崔子鐘和之以五

歌九章以贈崔子鐘和之以五

詩於是陽明子作八詠以答之

詩於是陽明子作八詠以答

其一

之

歌之傷我心

歌以傷我心

○「其二」→「其八」

○「其二」→「其八」

「題目、本文とも異同無し」

○「南遊三首」(第一首)

○「南遊三首」

賦南遊以申約也

賦南遊申約也

○「南遊三首」(第二首)

○「其二」

「本文に異同無し」

○「其三」

○「南遊三首」(第三首)

○「其三」

「本文に異同無し」

○「憶昔答喬白岩因寄儲柴墟」

○「憶昔答喬白巖因寄儲柴墟三首」

墟

「本文に異同無し」

○「其二」

○「二」

「本文に異同無し」

○「其三」

○「三」

「本文に異同無し」

○「一日懷抑之也抑之之贈既

○「一日懷抑之也抑之之贈既

賞答以三詩意若有歉焉是以

賞答以三詩意若有歉焉是以

賦也」(第一首)

賦也」

「本文に異同無し」

○「一日……賦也」(第二

○「其二」

首)

美人難可忘

美人難自忘

○「一日……賦也」(第三

○「其三」

首

〔本文に異同無し〕

○「夢與抑之昆季語湛崔皆在焉覺而有感因紀以詩」(第一首)

首

〔本文に異同無し〕

○「夢與・・・以詩」(第二首)

首

子午當其窟

子午當其窟

○「夢與・・・以詩」(第三首)

首

〔本文に異同無し〕

○「因雨和杜韻」ゝ「臥病靜

慈寫懷」

慈寫懷」

慈寫懷」

〔題目、本文とも異同無し〕

○「移居勝果」

○「移居勝果寺二首」(第一首)

首

〔本文に異同無し〕

○「無し」

○「移居勝果寺二首」(第二首)

首

○「無し」

○「無し」

○「無し」

○「草萍驛次林見素韻奉寄」

ゝ「玉山東嶽廟遇舊識嚴星

士」

〔題目、本文とも異同無し〕

○「廣信元夕蔣太守舟中夜

話」

畏地相求見古風

○「夜泊石亭寺呈陳婁諸公因

寄儲柴墟都憲及喬太常諸友

用韻」

〔本文に異同無し〕

○「過分宜望鈴岡廟」

共傳峰頭樹「C本のみ」

○「雜詩三首」(第一首)

〔本文に異同無し〕

○「雜詩三首」(第二首)

〔本文に異同無し〕

○「憶別」

○「泛海」

○「武夷次壁閒韻」

○「草萍驛次林見素韻奉寄」

ゝ「玉山東嶽廟遇舊識嚴星

士」

○「廣信元夕蔣太守舟中夜

話」

遠地相求見古風

○「夜泊石亭寺用韻呈陳婁諸

公因寄儲柴墟都憲及喬白巖

太常諸友」

○「過分宜望鈴岡廟」

共傳峰頂樹

○「雜詩三首」

○「其二」

○「雜詩三首」(第三首)

「本文に異同無し」

○「袁州府宜春臺四絕」

特修江藻拜祠前

有溫泉。右三先生祠

駕鐵船。右孚惠廟

○「夜宿宣風館」

「題目、本文とも異同無し」

○「謁濂溪祠萍鄉道中」

「本文に異同無し」

○「宿萍鄉武雲觀」

「題目、本文とも異同無し」

○「醴陵道中風雨夜宿泗州寺

次韻」

風雨偏從險道當「A本は『全

書』に同じ」

○「長沙答周生」

「題目、本文とも異同無し」

○「涉湘于邁嶽麓是遵仰止先

哲因懷友生麗澤興感伐木寄

○「其三」

○「袁州府宜春臺四絕」

持脩江藻拜祠前

有溫泉

駕鐵船

○「夜宿宣風館」

○「萍鄉道中謁濂溪祠」

○「宿萍鄉武雲觀」

○「醴陵道中風雨夜宿泗州寺

次韻」

○「風雨偏從險道當

○「長沙答周生」

○「涉湘于邁嶽麓是遵仰止先

哲因懷友生麗澤興感伐木寄

言」(第一首)

昔賢此藏修

衡雲開曉望

○「涉湘・・・寄言」(第二

首)

「勿愧點與回」までが第二

首

○「涉湘・・・寄言」(第三

首)

「陟岡採松柏」以下が第三

首

○「遊嶽麓書事」

橘洲僧寺浮中流

齒角虧盈分則然

○「答趙太守王推官次來韻」

「本文に異同無し」

○「天心湖阻泊既濟書事」

「題目、本文とも異同無し」

附居夷集卷之終

言」(第一首)

普賢此藏脩

衡雲開曉望

○「其二」(前半)

「第二首と第三首の切れ目無

し」

○「其二」(後半)

「第二首と第三首の切れ目無

し」

○「遊嶽麓書事」

橘洲僧寺浮江流

齒角虧盈分則然

○「次韻答趙太守王推官」

○「天心湖阻泊既濟書事」

○「天心湖阻泊既濟書事」

以上から判るように、内容的には、錢德洪により編纂された『王文成公全書』の「居夷詩」はもちろん、「獄中詩十四首」・「赴謫詩五十五首」も、表中で指摘した四首（移居勝果寺二首）「第二首」・「憶別」・「泛海」・「武夷次壁間韻」以外は順序も含め、殆ど完全に『居夷集』と一致していることがわかる。しかしながら、錢德洪がこれらの詩を収録したのは、『王文成公全書』が初めてではない。嘉靖十五年（一五三六）に彼を中心として刊行された、所謂「姑蘇本」『陽明先生文錄』において、既にこれらの詩は『王文成公全書』と同じ順序で収録されており、上記の『居夷集』には含まれていない四首もそこには収録されているのである。

従って、「居夷詩」・「獄中詩十四首」・「赴謫詩五十五首」の成立については、以下のような推論が成り立つと考えられる。つまり、「姑蘇本」編纂の際、錢德洪は『居夷集』からこれらの詩を引用した上で、彼自身の資料から四首を挿入し、『全書』においてもその構成を踏襲したのである。

個別の字句の異同については、上記對照表で明らかだが、特に注目されるのは、『居夷集』には逸詩が一首含まれていることである。この詩は從來全く知られていないものなので、以下にその全文と訓讀を挙げる。なお、本文はC本により、

現存最古の王守仁の詩文集（永昌）

A・B兩本との異同を註記した。

○「始得東洞遂改爲陽明小洞天」（逸詩）

群峭會龍場、戟雉四環集。

邇觀有遺觀、遠覽頗未給。

尋溪涉深林、陟嶽下層隰。

東風「A・B兩本は「東峰」に作る」叢石秀、獨往凌日夕。

匡穹洞蘿偃、苔骨經路澁。

月照石門開、風飄客衣入。

仰窺嵌竇玄、俯聆暗泉急。

愜意戀清夜、會景忘旅邑。

熠熠岩鶴翻、淒淒草蟲泣。

點詠懷沂朋、孔嘆阻陳楫。

躊躇且歸休、毋使霜露及。

群峭、龍場に會し、戟雉、四（よも）より環（めぐ）り集まる。

邇（ちかづ）きて觀（あ）へば遺觀有り、遠覽すれば頗る未だ給せず。

溪を尋ね深林を涉り、巘を陟れば下層隰（うるほ）ふ。
東風に叢石秀で、獨り往きて日夕を凌ぐ。
厓穹（きは）まりて洞蘿偃（ふ）し、苔骨、路を経て澁し。

月照して石門開き、風飄として客衣入る。

仰窺すれば嵌竇玄に、俯聆すれば暗泉急なり。

意を愜（こころよ）くして清夜を恋ひ、景に會して旅邑を忘る。

熠熠として岩鵲翻（ひるがへ）り、淒淒として草蟲泣く。

點、詠じて沂朋を懷かしみ、孔、陳楫に阻まるるを嘆ず。

躊躇すれども且く歸休せんとす、霜露をして及ばしむること母れ。

對照表に明示したように、本詩と『全書』の「始得東洞遂改爲陽明小洞天三首」とは、題はほぼ一致するものの、全くの別詩である。なぜ、このようなことになったかは、以下のように考えられる。錢德洪が文集を編纂した際、恐らくは不注意から本詩の本文が脱落したが、題のみが残り、それが次

の「移居陽明小洞天」の題とされてしまったのである。また、本詩の内容から見て、錢德洪が意識的に削除した可能性は少ないと思われる。

五

以上のことから、次のように結論づけることができる。『居夷集』は嘉靖三年（一五二四）に、當時餘姚の知縣であった丘養浩によって刊行された、王守仁の現存最古の詩文集である。王守仁の門人である韓柱と徐珊の二人は校訂者であり、錢德洪が本書の刊行者を徐珊としたのは、彼が友人であったための記憶の誤りであると考えられる。また、從來の推測とは異なり、『王文成公全書』卷之十九のうち、「居夷詩」以外の「獄中詩十四首」・「赴謫詩五十五首」も本書を元としているのである。

從來、本書については、黃綰および錢德洪の斷片的な言及によって書名が知られるのみであったが、王守仁の詩文集のうち、刊本の形で世に問われたものの嚆矢として、王守仁の著作の成立及び流布を考える上で重要な位置を占める存在であり、今後、陽明學研究者によって廣く利用されるべきであると信じるものである。

※本稿は二〇〇一年六月九日の早稻田大學東洋哲學會第十八回大會における口頭發表に加筆・修正を加えたものである。

注

- (1) 「僅足存者、唯文錄傳習錄居夷集而已」、嘉靖十二年（一五三三）刊『陽明先生文錄』卷首。
- (2) 「徐珊嘗爲師刻居夷集、蓋在癸未年。及門則辛巳年九月、非龍場時也」、隆慶二年（一五六八）刊『王文成公全書』卷之三十六。なお、癸未の年は嘉靖二年（一五二三）、辛巳の年は正徳十六年（一五二一）である。
- (3) 三島復『王陽明の哲學』「附録」、同書第五六四～五六五頁、大岡山書店、一九三四年。
- (4) 『北京圖書館古籍善本書目』第二三四七頁、書目文獻出版社、一九八七年。
- (5) 『中國古籍善本書目 集部上』第六一八頁、上海古籍出版社、一九九六年。
- (6) 馬紹基については、『清代官員履歷檔案全編』（中國第一歷史檔案館藏、秦國經主編、華東師範大學出版社、一九九七年）第六二四頁に收録された乾隆五十六年（一七九一）十月の檔案に、「馬紹基、江蘇蘇州府元和縣監生。年五十三歲。現任廣西萬承土州州同」（馬紹基、江蘇蘇州府元和縣の監生。年五十三歲。現任最古の王守仁の詩文集（永昌）

三歲。現任は廣西萬承土州の州同」とあることから、逆算により乾隆四年（一七三九）の生まれであることが判明する。また、校語には『居夷集』以外の諸本との相違點が記されている。

- (7) 「乾隆四十九年正月望後、元和後學、香谷馬紹基、校於南寧府平塘分署」
- (8) 孫毓修は江蘇省無錫の人。字星如・恂如、號留庵、別號綠天翁等。光緒三十二年（一九〇六）前後より商務印書館で高級編譯として勤務。民國十一年（一九二二）没。従って識語の甲寅は光緒十六年（一八九〇）である。
- (9) 「居夷集者、陽明先生被逮責貴陽時所著也。溫陵後學丘養浩、刻以傳諸同志。或曰、先生之學、專以孔孟爲師、明白簡易、一洗世儒派分枝節之繁、微言大訓、天下之學正宗之。而獨刻此焉何待。則解之曰、先生之資、明睿澄徹。於天下實理、固已實見而實體之。而養熟道凝、則於貴陽時獨得爲多。冥會遠趨、收衆淆以折諸聖。任道有餘力、而行道有餘功。固皆居夷者之爲之也。古聖人歷試諸難、造物者將降大任之意、無然乎哉。養浩生也後、學不知本、政不足以率化。先生輒合而教之。歲月如過、典刑在望、愧無能爲新主簿之可教、而又無能爲元城之錄也。引以言。同校集者、韓子柱廷佐徐子珊汝佩、皆先生門人。嘉靖甲申夏孟朔、丘養浩以義書」なお、嘉靖甲申夏孟朔とは、嘉靖三年（一五二四）四月一日である。
- (10) 「夫文以載道也。陽明夫子之文、由道心而達也。故求之躍如

也、究之奧如也、體之擴如也、愛之美也、傳之愛也。此居夷集所由刻也。刻惟茲者、見一班也。學之者求全之志、烏乎已也。門人韓柱百拜識」

- (11) 「居夷集刻成、或以爲、陽明夫子之教、致知而已、諸文字之集、不傳可也。珊謂、天有四時、春秋冬夏、風雨霜露、無非教也。地載神氣、風霆流形、庶物露生、無非教也。夫子居夷三載、素位以行、不願乎外。蓋無入而不自得焉。其所爲文、雖應酬寄興之作、而自得之心、溢之言外。故其文、閱以肆、純以雅、婉曲而暢、無所怨尤者。此夫子之知、發而爲文也。故曰、篤其實而藝則傳。賢者得以學而至之、是爲教、則是集也、無非教也。不傳可乎。如求之言語文字之間、以師其繩度、是則荒矣、不傳可也。集凡二卷。附集一卷、則夫子逮獄時及諸在途之作。併刻之、亦以見無入不自得焉耳。門人徐珊頓首拜書」

- (12) 「丘養浩、字以義、……二十四成進士、是爲正德辛巳歲。授餘姚令。……嘉靖乙酉召入爲御史、明何喬遠撰『閩書』、『四庫全書存目叢書』據福建省圖書館藏明崇禎刻本影印、同叢書第二百六冊、莊嚴文化事業有限公司、一九九六年。なお、正德辛巳の歲は正德十六年(一五二一)、嘉靖乙酉は嘉靖四年(一五二五)であり、逆算により弘治十一年(一四九八)の生まれであることが判る。

- (13) 「珊、號三溪、餘姚人。官辰州府同知、清永裕・紀昀等撰、『景印文淵閣四庫全書』第一冊、臺灣商務印書館、一九八六

年。

- (14) 『浙江通志』卷之百三十七、清嵇曾筠等監修・沈翼機等編纂、『景印文淵閣四庫全書』第五百二十二冊、臺灣商務印書館、一九八六年。

- (15) 「夫子還姚、君相率諸友范引年管州鄭寅徐珊吳仁柴鳳等數十人、闢龍泉中天閣、請夫子升座開講、明王畿撰・丁賓編『龍溪王先生全集』卷之十九、內閣文庫藏、萬曆四十七年(一六一九)刊。

- (16) 「癸未南宮發策、以心學爲譏。餘姚有徐珊者、亦陽明之門人、不對而出。先生之對、與徐珊之不對、一時兩高之。而珊爲辰州同知、侵餉縊死(時人爲之語曰、君子學道則害人、小人學道則縊死)、人羞稱之。所謂蓋棺論定者、非耶」、清黃宗羲撰、中華書局、一九八五年。